

国際芸術シンポジウム講演論文および事業報告

横 川 善 正

はじめに

記念作品展、記念フォーラム、五十周年史の刊行などの一連の行事からなる、金沢美術工芸大学の開学五十周年記念事業の主旨は、これまでに本学が歩んできた歴史を振り返り、その今日的な意義を問い直し、将来を展望することにあつたと思われる。なかでも、国際芸術シンポジウムは、本学の芸術教育および創作活動を、これまで交流をもってきた海外の美術大学からの提言のもとに、学生および教員が市民を交え、より建設的に自己検証するための機会として位置付けられたものである。

あえていうならば、我々にとって国際化の意義とは、異言語としての芸術と文化を日々の研究と教育の場においてじかに共有することにより、互いに自己の本来性を取り戻し、個々の創作意欲と意識の昂揚を促すところに見いだされるものであろう。しかしながら、すべての文化および教育活動がそうであるように国際交流もまた、その成果を性急にはっきりと目に見えるかたちで求めることは、ましてそれが国の政策として脚光を浴びたり、もてはやされればされるほど、マイナスの効果やある意味での危険性さえ伴うのである。にもかかわらず、芸術を中心媒介として進められてきた我々の異文化の理解が、それに関わるアーティストの個性的な信頼関係と相互啓発のなかで、時間とともに静かに熟成し、やがて大学組織から社会全体に浸透してゆくものと信じたい。

今回のシンポジウムに参加した、フランスのナンシー国立美術大学とベルギーのアントワープ王立芸術大学は、金沢市との姉妹都市交流を背景に、本学の学生と教員にとって身近な存在となり、着実にその歴史を刻みつつある。さらに、ニューヨークのバード

大学とスウェーデンのヴァランド芸術学院そして韓国の慶星大学は、美術工芸研究所が中心となって推進してきた展覧会や人的交流のなかで、本学にとって重要な海外学術交流の拠点機関となっている。これらの各機関からのパネリストたちは、美術・デザイン教育の専門家であると同時に、大学組織の代表者を兼ねる立場にあることから、その発表は今後の交流事業にたいする具体的な提言と深い理解に裏打ちされたものであった。

以下、各講演者の原稿の全文とその発表概要を紹介する。また実際の講演が時間の都合により短縮されたことを、ここに深くお詫びする次第である。

ナンシー国立美術大学の情報デザイン科長、クリスチャン・ドゥビーズ教授は、「ナンシー派と日本」と題して、日本画家高島北海を中心に、日本の芸術文化がフランスのアール・ヌーヴォーの最大拠点のひとつとなったナンシーにおいていかに評価され、以後それがいかに当地の美術文化に影響を与えたかについて語った。

アントワープ王立芸術大学の学長ジャンタル・デ・スメット女史の「ベルギーの美術教育の歴史と展望」では、フランダーズという地域において展開された独自の美術教育の内容とそれを可能にした背景について歴史的に紹介し、さらに変革期を迎えるヨーロッパの美術教育全体の流れを展望した。

ニューヨーク、バード・カレッジの副学長のデミトリ・パパデミトリオウ氏は「芸術教育と美術館」に焦点をあて、アメリカ社会における芸術の果たす文化的価値の大きさを指摘した。これからのアートが日常的な娯楽や商品あるいは社会的なステータス・シンボルとしてではなく、生活の本質的規範と

しての価値を有することが課題となっている。そのなかで、美術館の果たす役割は大きく、昨年新設された同大学の美術館学芸員養成コースが掲げるヴィジョンにふれながら、幅広い世代の人々が生活や文化の総和としての美の世界に積極的に参加が可能な、新しい美術館像が提示された。

韓国、慶星大学の助教授、権相仁女史は「韓・日現代陶芸について」のなかで、韓国と日本を含む極東アジアにおける相互的な芸術活動の可能性について、両国の陶芸文化の歴史的遺産の差異を検証しながら展望した。なかでも韓国内に点在する陶磁の産地の紹介は、日本との歴史的のみならず地理的なつながりを示唆する有意義な指摘であった。

スエーデン・エーテボリ大学のヴァランド芸術学院からは、国際交流室長のギセラ・クンツ女史より、「金沢美大との交流について思うこと」と題して、これまでの本学との学生間交流に立ち合ってきた女史の感想が述べられた。なかでも、永続的な交流を可能とするためには、関係者の熱意のみならず、交流基金の確保といった具体的な方策の必要性を訴えた。

(金沢美術工芸大学教授 英語)

訳者紹介

青柳 りさ (金沢美術工芸大学助教授 フランス語)

神谷 佳男 (金沢美術工芸大学助教授 共通造型センター)

大槻さち子 (金沢美術工芸大学大学院2年)

原田真千子 (フリー・アート・コーディネーター)